

社会科の授業を対人援助学の視点から⑦

2024年11月15日 内田一樹

3年目の石巻スタディツアーを終えて

3年目となる今年はテーマを食に定め、第一次産業に携わる方々との交流を重視した。7月11日（木）～14日（日）までの3泊4日の石巻市でのスタディツアーであった。

大まかな行程は次のとおりである。

7月11日（木）：宮城県石巻市へ移動、スタディツアー開始

東日本大震災津波伝承館

震災遺構門脇小学校・南浜・門脇地区・MEET 門脇見学、研修

（3.11メモリアルネットワーク藤間さん案内）

7月12日（金）：震災遺構大川小学校（大川伝承の会の紫藤さん案内）

雄勝ローズファクトリーガーデン研修・作業（代表の徳水さん講演）

7月13日（土）：石巻市牡鹿町ツアー

合同会社もものわさん研修（代表の森さん夫妻案内）

鮎川捕鯨さん研修（社員の平塚さん案内）

牡鹿ホエールランド研修（学芸員の山本さん案内）

7月14日（日）：あかま里山農園研修（赤間さん案内）

石巻市から仙台市へ

せんだいメディアテーク・3がつ11にちをわすれないためにセンター

（記録者の橋本さん講演、研修）

昨年まで継続して訪れている震災遺構や3がつ11にちをわすれないためにセンターなどと、新たに今年初めて訪れたローズファクトリーガーデンや牡鹿町ツアー。その地域に根差して「生きる」ことにフォーカスした訪問先となった。

雄勝ローズファクトリーガーデンは今年の3月に一度訪れて、その際に代表の徳水さんにつながった縁で今回高校生のツアーでの研修先として依頼した。徳水さんの防災研修ではその地域に「生きる」にあたって、命を守るために考えておかなければならない視点を教えていただいた。そのあとの「復興」にあたっての事業についての説明では地域の人口減少という地域課題と雄勝ローズファクトリーガーデンの事業がどのようにつながり、解決していこうとしているのかについての説明をいただいた。

講演内容を通して「地方自治」ということを強く感じた時間になった。これは社会科教員だからこそそう感じた部分も多分にあるのかもしれない。自分たちの住んでいる地域を知ること、過去の歴史や地図から災害への備えをすること。そして地域課題解決のために地域の住民が立ち上がって事業（プロジェクト）を行っていくこと。その中で外からの企業誘致を、という話も震災後にはあり、雄勝ローズファクトリーガーデンも移転を余儀なくされる場面もあった。まだ移転について交渉をしている段階でほかの話がついた土地、場所から道路を作っていく、という行政の話には、なるほどそういうやり方をするのか、とうなずきにいら

れなかった。これでは交渉といいつつ、結論は決まっていって移転せざるをえない。結果的には誘致していた企業がつぶれ、行政はボトムアップ型復興策を進めることとなった。

高校生たちは講演を終えた後も積極的に徳水さんに質問をしながら、学びを深めていた。防災に関するものだけではなく、復興にかかわる一つの形を学ばせてもらっている様子だった。実際にラベンダーつみのボランティア活動にも従事して、体験的に学びを深めていた。

以下は今年度のスタディツアーの感想のうち、ローズファクトリーガーデンでの学びを通して感じたことをいくつか抜粋したものである。

A「私も自分が生まれ育った町が、自分や地域の納得や理解を得ずに変わっていく姿は見たくないから当事者であれば反対するだろう。でも忘れたくないのは国や政府は国民を守るために、このような決定にしたことだ。それは一方的な不条理劇ではなく、国の「国民を守る」義務を果たした結果になる。私は、この地域の声と国の判断・決定の「差」が復興での難点の大きな一つだと感じた。

この難点の解消には住民と政府による歩み寄りの精神がカギになってくる。実際に、雄勝ローズファクトリーガーデンの徳水さんは、「住民の声が届き、要らない防潮堤の削減に成功した地域がある」と言っていた。これが住民と政府による歩み寄りのできた共同性だと思った。けれどこの結果も、住民の納得いかない反発心から生まれた反対運動によるものだ。最善の復興とは、根本的に反発心を起こさせないものだと考える。だからこそ復興に必要とするのは、しっかりとしたグランドルールとローカルルールになる。国民を守る最低限度の基準を守りながら、住民の納得を得る形にする。そのようなグランドルールを作るのには政府と国民による歩み寄りの精神で、しっかり議論し吟味しなければならない。この共同ができなければ、復興は一方的な不条理劇になりかねない。グランドルールの上で独自性を持ったローカルルールができたら最善な復興に繋がる。私は、何を守るか分からなく海が見えないほど高い防潮堤を見て、セメント会社が儲かる仕組みを聞いて、地域と政府の共同性を思った。復興の大きな難点を解消するのは共同性にあるかもしれない。」

B「午後の雄勝ローズファクトリーガーデンさんの話では、科学的な視点からの防災の話と、動画内の「自分の歴史がなくなったみたいだった」という言葉が心に残っている。科学的なアプローチからの話は新鮮だったし、雄勝ローズファクトリーガーデンという形で、自分のできる範囲で、自分が可能なことを、着実にしているその姿勢と、失敗はないという姿勢が、素敵だと思ったし、自分にはまねできないと思った。さらに、小さな自治から大きな自治へなど、直接的な意味でも学びは多かったし、「自分事として考える」という趣旨の言葉から、社会の物事や抽象的な物事を自分事として捉えていくことの重要性に、改めて気づかされた。さらに、「社会を構成する一人として批判だけで無く自らも責任を負い創っていく必要がある」という趣旨の言葉に自分が社会を構成する一人であるという事実も強く再認識させられ、もうすでに社会の動静の一端を握ってしまったと気づいた。これに気づくと、かなりつらかったと同時に、自らができること、そしてやりたいことを、自らのペースで、やっていくしかないとも思った。評価表にも書いたとおり、かなり「物語性」ということばが心に残っているのだが、「自分の歴史が消えてなくなったみたいだった」という言葉は自らの今までの物語を証明するものがなくなったという意味だろう。自分が生きた物語を大切だと思っているべくにとって、「自分の歴史が消える」これをもし自分が感じたなら、それは自分にとって耐えがたいものになると思う。このスタディツアーで最も心に残っている言葉はこれだ。」

C「雄勝ローズガーデンファクトリーでの徳水さんからの話を聞いたときには、自分自身の震災から身を守ることを考えることが大切なのだと分かりました。お話を聞く前の自分の中では、避難訓練さえすれば

いいやと思っていたのであまり自分自身の身を守る行動などはあまり考えてはいませんでした。お話を聞いた後では、周りに従っているだけでは駄目なのだと実感し、自分自身の中では自分自身を守ること、自分の家族といつでも連絡を取れるようにコミュニケーションをとること、震災時の避難場所の確認などをするようになりました。」

D「体験活動では、ラベンダー摘みすごいきれいに摘むことができてうれしかった！虫が多くてそこはちょっと嫌だったけど周りの人とも話しながら摘んだりしてすごい楽しみながら活動できました。ラベンダーのアロマとか昔から家で使ってたから近くに触れることができていい経験ができました。オリーブオイルがけソフトクリーム、初めて食べた味わいだったけど結構おいしかったです。喉にくるな～とは思ってたけどソフトクリームの冷たさで結構いい感じになってすごかったです。」

E「雄勝ローズファクトリーガーデンでは、徳水さんから防災教育プログラムやローズファクトリーガーデンの成り立ち、ラベンダーの収穫体験をさせていただいた。防災教育プログラムでは津波防災能力を高めることを目的としていて、雄勝小学校や大川小学校を襲った津波の特徴や自分の地域の災害リスクについて知ることの大切さなどを教わった。私たち用に埼玉、東京の災害リスクも教えて下さり、無意識に抱えている自分の近くは大丈夫だろうという慢心を壊してくれるようなものだった。後日自分の住んでいる地域のハザードマップを見てみたところ、洪水や土砂災害の危険性もなく基本的に安全な地域であることが分かって安心した。けれど、地震や強風、火事が起きたら危ないことになりはしないし、外出先で災害にあうということも想定に入れておかなければいけないので慢心せずに学び続けようと思った。また、防潮堤は本当に必要なのかという問題についてもお話ししていただいた。もう人が住めなくなっている地域にもかかわらずあえて実際に来た津波よりも低い防潮堤を立てて何になるのか。住民の批判を押しつけてまで必要なものなのだろうか。もう少し住民との話し合いの機会を設けてからでもよかったのではないかとお話ししていて、すごく難しい問題だなと感じた。ローズファクトリーガーデンの成り立ちでは徳水さんたちが復興にすごく力を入れていることが分かって、頑張っしてほしいなと思ったと同時になにか遠くに居ても手伝えることはないか考えてしまった。きっとこの石巻に住み一緒に活動をしていくことが一番の復興なのだろうけれど、どこか他人事でこの復興を進めるメンバーには自分はいれないだろうなと思ってしまう。ラベンダーの収穫体験ではその名の通りラベンダーの収穫をした。ハチが群がっているラベンダーを収穫するのはだいぶ怖かったけれど、思っていたよりハチは人間にやさしく、刺さないで採らせてくれた。ハチに対しての苦手意識が薄れ後半は楽しく収穫できた。この日この瞬間が一番成長を感じたかもしれない。過ごしているうちに五時になり夕焼けチャイムが鳴った。その音は静かな雄勝に響きよく聞こえるのと同時に、今いる場所に人はもう住めないのだということを忘れていた私の心にひどく残った。」

高校生のみずみずしい感性に満ちた言葉の一部であるが、主として防災研修を通して自分の住む場所、地域、家族とどう話し合っておくかなどを自分事としてひきつけている人が多い。ラベンダー摘みの体験については、虫（ハチ）との格闘を通して、楽しんで参加していることがうかがえる。実際の雄勝ローズファクトリーガーデン（雄勝花物語）の活動の一部としてやっている実感もあるのかもしれない。ただ一方でEが書いているように「ローズファクトリーガーデンの成り立ちでは徳水さんたちが復興にすごく力を入れていることが分かって、頑張っしてほしいなと思ったと同時になにか遠くに居ても手伝えることはないか考えてしまった。きっとこの石巻に住み一緒に活動をしていくことが一番の復興なのだろうけれど、どこか他人事でこの復興を進めるメンバーには自分はいれないだろうなと思ってしまう。」と揺れている。自分自身の立ち位

置やできることを考え、その難しさを前に「この復興を進めるメンバーに自分はいれないだろうな」と感じている。安易に、復興のメンバーに入れる、あるいは復興の手助けができる、と言うよりも、この難しさを感じていることの方が大切な気持ちがある。この難しさ抱えながら、それでも自分にできることを、と前に進めていくような授業の展開や取り組みをどうしたらよいのだろうか。ラベンダーの収穫体験という形でその一部にでもかかわらせてもらえたことは大きかったかもしれない。「過ごしているうちに五時になり夕焼けチャイムが鳴った。その音は静かな雄勝に響きよく聞こえるのと同時に、今いる場所に人はもう住めないのだということを忘れていた私の心にひどく残った。」という言葉は、夢中になってラベンダー収穫をしていたEにとって現実に引き戻すものであったに違いない。研修や体験を1日してきた当たり前に営みができているこの場所が、実はもう人が住めない場所であること、少し行けば大きな防潮堤がそびえたち、その内側で夕方のチャイムになっていることが複層的に思い起こされる。

一方でAとBは徳水さんの話から防災だけにとどまらない部分で気づきを得ている。Aは復興と政治の関係についてふれている。「私は、何を守るか分からなく海が見えないほど高い防潮堤を見て、セメント会社が儲かる仕組みを聞いて、地域と政府の共同性を思った。復興の大きな難点を解消するのは共同性にあるかもしれない。」地域と政府の共同性、それは地域からしっかりと声をあげていき、その声を聴くことができる体制があるのかもしれない。国の政治と地方自治との間で復興はすすんでいくことに気付いている視点である。そして地方自治は民主主義の学校である。地方自治を進めて地方からの声をしっかりと国の政治に反映させること、そして国の行政もしっかりと国に耳を傾けること。これがAのいう「共同性」につながる。Bは「「自分事として考える」という趣旨の言葉から、社会の物事や抽象的な物事を自分事として捉えていくことの重要性に、改めて気づかされた。さらに、「社会を構成する一人として批判だけで無く自らも責任を負い創っていく必要がある」という趣旨の言葉に自分が社会を構成する一人であるという事実も強く再認識させられ、もうすでに社会の動静の一端を握ってしまったと気づいた。これに気づくと、かなりつらかったと同時に、自らができること、そしてやりたいことを、自らのペースで、やっていくしかないとも思った。」と書いている。「自分が社会の一部」として起きていることに対して責任の一端を引き受けること、これは自分ごととして見聞きしたことを引き受けていく第一歩だろう。それはAの言葉の中に出てきた復興の中で「地域の声と国の判断・決定の「差」」によって起こっていることの責任の社会を生きる一員として引き受けようとしているのではないだろうか。だからこそ「かなりつらかった」という感じ方にもなる。日本が民主主義国家である以上、確かに国の政治（国会や内閣によるもの）に対する責任は選挙権を持つ一人一人が負うべきだろう。まだB自身は高校1年生なので、その意味ではまだ負わなくても良いといえるかもしれないが、あと2年後には成人である。

対人援助において、傾聴は重要な要素とされる。しかしそれは1対1の場面においてのみなされるべきものであろうか。社会全体で、あるいはその地域全体の中で傾聴がなされていかなければ、対人援助は対処療法的になってしまう。起こった被害を個々に固有のもの、特有のものとして認めていきつづけることが、かえって被害をどこかの地域、誰かにだけ押しとどめてしまうことになりかねない。固有のものの特有のものはありつつ、しかしそれでも自分事としてそれを社会全体で引き受けていかなければ、孤立を生んでしまうのではないだろうか。そしてその被害の話を聞いて、お客さんとして「ひどいなあ」と感じた、考えたにとどまることになりかねない。「地方自治」の中で自分たちで声をあげていくこと、そしてその声をきちんと自分事（他人事になっているかもしれないというメタ的認知も含めて）として引き受けていくこと、そこから新

しい発見をしたり感じたりしていくことが将来の対人援助にとって重要な素養をつくっていくのではないだろうか。

そのほか次のような感想があった。

E「また現地の方から話を聞いたことで、「復興」への考え方が少し変わりました。今までは、震災前のにぎわいを取り戻すことや滞ってしまった文化や伝統を再生させる、以前のような生活が送れるようにすることが復興だと考えていました。しかし3日目に阿部さんが「復興は新しい時代に合わせてつくること」とおっしゃっていて驚きました。そこで、必ずしも元に戻すことが正解とは限らないと気づきました。防潮堤をつくることも住民全員が賛成している訳ではないということを初めて知りました。確かに海の近くは人が住めなくなったのだから作る意味がないと言われればないとも言えるし、これまで海が見えていたのが見えなくなる寂しさにも納得しました。防潮堤について考え方が一人一人違うように、復興についてもそれぞれの考え方があるのかなと思います。だから復興のゴールは一人一人が持っているもので、正解はないのかもしれないと考えるようになりました。私が石巻に着いて最初に思ったことは何もなくてなんかガランとしてるなということでした。でもローズガーデンファクトリーさん、鮎川捕鯨さんなどたくさんの方達に出会って、石巻の方の温かさを感じました。また自分が住む町に愛情を持っている人って素敵だなと思いました。

私がこのツアーで一番強く感じたことは日頃のコミュニケーションの大切さです。困った時に頼れる人がいることはとても大切です。信頼関係を築いていけばいざとなったとき助けを求めることができるし、逆に誰かを助けることができるにあかまさんはおっしゃっていました。わすれンで話してくださって橋本さんからは、全盲の人は周りの人がその人が全盲ということを知っていたから助けに来てくれたという話や、橋下さんはギリギリになるまで助けを求められなかったという話を聞きました。私はこれを聞いて、「助けて」って言える相手がいるだけでどれだけ心強いかとあかまさんの言っていたことがよく分かりました。」

「助けて」を言うことができること、その中には言うという行動を自分自身ができること、言うことができる頼ることができる相手がいること等を含んでいる。「助けて」という言葉を発しても良いのだと相手に伝えるコミュニケーションだけではなく、相手から「助けて」をお互いに言える関係性。そうした関係をつくっていくための素養を高校の授業においては養っていきたいが、そのためにこうしたスタディツアーを通して実感を通して子どもたち自身が発見できることが大切なのだろう。